

東日本巨大地震 関連情報（第3報）

平成23年3月16日
全国老人クラブ連合会

●東日本巨大地震に関する、老人クラブ関連の情報をお伝えします

1. 岩手県老連からの情報

別紙のような震災情報を昨日作成し、役員三役にファックスで伝えました。

町長も行方不明になっている太平洋沿岸の町、大槌町老連会長の無事が確認されたことが報告されています。

2. 秋田県老連からの情報

秋田県五城目町と井川町の老人クラブでは、地震のあった11日、岩手県大槌町のホテルに会員42名で旅行に出かけていました。幸い無事で、ホテルの浴衣に半纏、スリッパの姿で、13日にホテルのバスで地元に戻ることができました。また大槌町に戻るホテルのバスには、秋田県や秋田市からの支援物資が積み込まれたそうです。その間の様子が地元新聞に掲載されましたので添付します。

●被災地以外の老連から

1. 神戸市老連（事務局 笹さんの電話）

「神戸市老連の役員さんも、今回の地震に強いショックを受けています。テレビを見ていて、16年前の阪神・淡路大震災のことを思い出して悲しくなったと話されます。早速、募金活動を始めました。」

平成 23 年 3 月 15 日

東日本大震災情報 第 1 報：広報誌「いわて老連だより」

○ 大槌町老人クラブ連合会柳田会長・小林事務局長「元気です！」

本日午前 10 時 30 分ごろ突然、県老連事務室に大槌町老連柳田光悦会長が元気な姿を見せました。

私ども職員は「良かった・良かった」の大きな声で抱き合いながら喜び会った。

どの様にして来ましたかと聞きましたら、長男が盛岡市から安否確認するため大槌町にきて避難場所で会った。(偶然でした)そのまま、盛岡市に向って着いたとのことでした。

先ず応接に案内して、お茶をだしてから話を聞きました。柳田会長の話を聞くと「津波で町中心部は壊滅です。私の家も流されました。着たまま避難をするだけで精一杯でした。町老連の事務を担当している小林敏子のご夫妻で町中央公民館に避難しております。町老連の単位クラブは 27 クラブ 733 名ですが、半分の会員は津波にあって避難している状態です。

柳田会長は「町老連の関係書類を何もありません。今後のことは考えられません。」と言っておりました。写真で元気な姿を伝えたいと言って撮りました。

その後、元気でお帰りになりました。

○ 県内市町村老人クラブ連合会事務室へ電話が通じました。

- 1 洋野町老人クラブ連合会：災害があった。
- 2 盛岡市老人クラブ連合会
- 3 花巻市老人クラブ連合会
- 4 北上市老人クラブ連合会
- 5 奥州市老人クラブ連合会
- 6 一関市老人クラブ連合会
- 7 二戸市老人クラブ連合会 とは連絡をとりました。



県老連事務局職員



柳田光悦大槌町会長

担当：岩手県老人クラブ連合会事務局 野辺地 電話 019-637-6544

「ほよつに逃げた」

無事帰京の43人間一髪

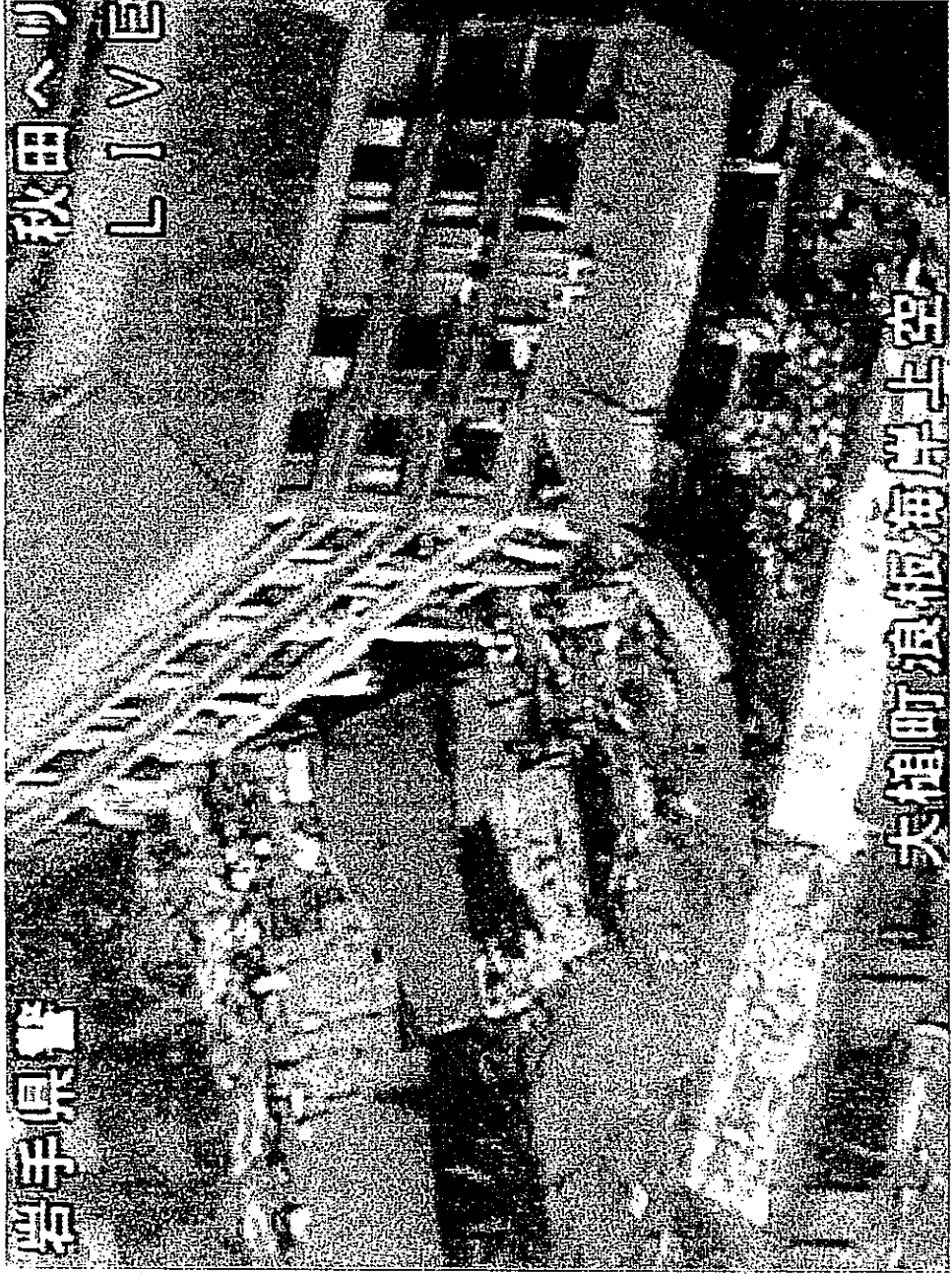
岩手県大槌町の浪板温泉に滞在する目的の11日、東日本大震災に見舞われた五城目、井川町の高齢者43人が13日、本県に無事到着した。太平洋を眼前に望む宿泊先のホテルで観劇中だった一行は、地震発生直後、ホテルが用意したとみられるバスや徒歩で付近の高台に避難。ホテルは間もなく津波にのみ込まれた。地震発生からホテルを出るまでわずか数分。ホテル側の冷静な判断と迅速な対応が一行を守った。(横方幸人、三浦美和子、荒川康一)

全体がスーツとぎらわれない。ホテルが用意したとみられるバスが1台あり、メンバーは高台にある地元の集会所・若葉会館に到着。猪田さんはバ

宿泊先の浪板観光ホテルは、代の男女42人と北都トラベル(秋田市)の添乗員新井治子さん(52)と大仙市。10日から泊3日の日程で、同ホテルに宿泊。11日午後、ホテル地下1階の劇場で大家

演劇を兼ね、午後8時の終演に差し掛かった時、地震に見舞われた。2分以上の長い揺れが続き、舞台横のステージには従業員がしがみついていた。「揺れが大きく、腰

が抜けてしまった。ほよつにして逃げた」とメンバーの1人、猪田三子(56)と五城目町上樋口。ホテル従業員は「津波到達まで30分ほど。高い所に避難します」と告げて一行を誘導。やや高い位置にある国道沿いにいったん避難した。



この日朝、窓から黄色がかった海を見て不思議に思った猪川哲男さん(79)と町田六川下樋口には、津波を知らせる防災無線も聞こえた。「とにかく上へ、上へ」という従業員の声に従い、海と反対側の土手を登った。振り返るとホテルは2階まで波にのみ込まれ、ステージや床板が一気に沖に流されていた。猪田さんは「ホテル周辺の集



43人が津波被害に遭った岩手県大槌町のホテル。13日午前9時10分ごろ、県警へ「やまびこ」から(県警提供)

「お帰りなさい」「心配かけた」 家族と涙の再会

「心配かけた」「無事で何よかったです」。岩手県大槌町に旅行に出掛け連絡が取れなくなっていた五城目、井川町の高齢者43人は13日午後8時30分、五城目町役場に到着。出迎えた家族らと無事を喜び合った。

この日午前9時50分ごろ、ツアーを企画した北都トラベル(秋田市)に一行の家族から「全員無事」との連絡が入った。ほかの旅行参加者から

でも迎えた。涙を流しながら抱き合い、家族から「お帰りなさい」と声を掛けられた。着の身着のまま2日間の避難所生活のため、持病の薬を服用できていない人のほか、精神的ショックや疲れを訴える人も。町は今後、参加者

「心配かけた」「無事で何よかったです」。岩手県大槌町に旅行に出掛け連絡が取れなくなっていた五城目、井川町の高齢者43人は13日午後8時30分、五城目町役場に到着。出迎えた家族らと無事を喜び合った。



ちんちゃん 730PQジョージ

王子さま お願いがえします

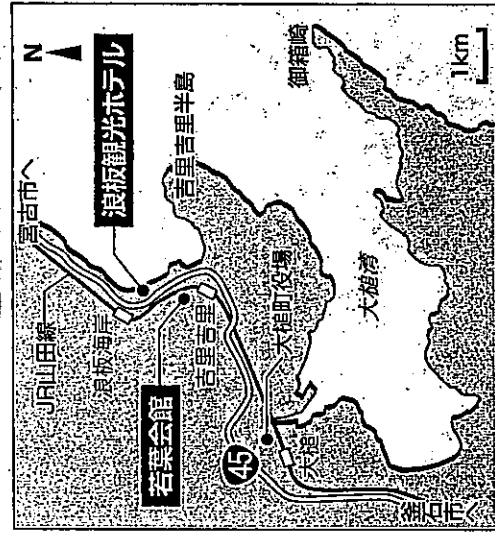
出した物はちんちゃんに片付けなさい、何と度いたら責めるの!

今度の朝は、おどろきアセンブルの賞えたのおおき

1244 744 744

1244 744 744

114 114 114 114



バスツアー参加者の足取り

▲10日
 午前 五城目町を出发
 午後1時 浪板観光ホテル着

▲11日
 午後1時 ホテルの地下1階和室で観劇スタート
 午後2時46分 地震発生
 従業員誘導で国道に避難
 津波が襲来。さらに高台へと歩き、ホテルの南にある若葉会館へ避難

▲12日
 午後 参加者の家族が「連絡がつかない」と五城目署に相談。県や県警、五城目、井川両町が安否確認を急ぐが電話はまったく通じず

▲13日
 午前6時半 一行はホテルのマイクロバス2台に分乗し若葉会館を出发。海岸沿いの道路を北上し、盛岡方面に向かう

▲午前9時50分 参加者から電話連絡を受けた家族が旅行社に「全員無事」と連絡。直後に添乗員からも会社社に連絡が入る。バスは盛岡市を経て仙北市へ

▲午後2時25分 仙北市角館町で旅行社が差し向けたバスに乗り換える

▲午後3時35分 一行が五城目町役場に到着、家族と再会

スに乗らず、途中で徒歩で会館へ。途中、巨大な津波が見えた。恐怖で泣き出す人、叫ぶ人。JR山田線の線路を覆り、手をのびたり、肩を支え合ったりして会館を目指した。会館はホテルから南に直線距離で約500メートル。バートのほとんぷが浴衣ははいて、スリッパ履きだった。同会館では、おにぎりとおみそ汁の炊き出しがあった。コメやシヤツなどの下着類を地元住民が提供。反時計回りでも用意された。地震翌日の12日、従業員らがホテルの様子を見に行ったら、ほとんど瓦礫状態だった。13日は午前6時半、同会館をホテルのバスで出発。添乗

員の新井さんから「今日家に帰れる保証はありません」と告げられたが、「皆さん、強い意志を持って」と一言が、一行の支えになった。新井さんは「自分たちが大切にしてきたホテルの人たちや地元の人たちに、ただただ感謝している。各地の被害を聞くとき、自分たちは本当に運が良かった。年寄りだけに、

けれども、生きていられることに皆さんに、大槌町にお礼をしなければと思っています」と話した。

大槌町長ら 連絡取れず

岩手県大槌町の加藤幸輝町長や職員との連絡が13日現在、取れていないことが分かった。東日本大震災により町役場が大津波に押し流され、町長らは建物内にいたと知られている。

43人そろって大槌町へ引き返すバスに県など支援物資

岩手県大槌町で被災した県民43人を仙北市まで送り終えた。岩手県大槌町の加藤幸輝町長や職員との連絡が13日現在、取れていないことが分かった。東日本大震災により町役場が大津波に押し流され、町長らは建物内にいたと知られている。

校野善男官房長官は12日の記者会見で、被災地の中で大槌町など連絡が取れていないことを明らかにしていた。

た浪板観光ホテルのマイクロバスに13日、県や秋田市の支援物資が運び込まれた。県による災害支援の一環で、バスは同日午後1時半ごろに43人を仙北市まで無事に送り届けた。

た後、物資を満載し同町へ戻った。県が提供した物資は、毛布100枚や肌着、紙おむつ、飲料水など。秋田市もカップラーメンやパンなどを提供した。43人が宿泊した同ホテルの営業支配人でバスに同乗した小笠原弘孝さん(47)は「(支援は)本当にありがたい。早く避難所に届けたい」と声を詰まらせた。43人は、仙北市の国道46号沿いの駐車場で県の手配した民間会社の大型バスに乗り移った。間もなく、支援物資を積んだ県のバスが到着。43人のうち数人は疲れた様子も見せず、「助かったのはあなたたち(小笠原さんら)のおかげ」と感謝の言葉を述べながら、支援物資の入った段ボール箱をバスからバスへ手渡しで運び込むを手伝っていた。(選藤享之)

避難所を出てホテルのバスで帰る際に通り掛かった大槌町中心部。津波で壊滅状態になっていた。13日午前7時ごろ、ツアー参加者の館岡晴作さん撮影

の健康相談を行うことを検討している。また「岩手県の皆さんの対応に感謝したい」として、今後、大槌町に物資や義援金を贈ることも検討する。

北都トラベルによると、一行の旅行は15年ほど前から企画しており、五城目、井川町の老人クラブの会員が主なメンバー。毎年1〜2回、県内や岩手、青森、山形など平日程度でバスで移動できる温泉地に旅行しているという。



家族らと再会し、涙を見せるツアー参加者。13日午後3時40分ごろ、五城目町役場



発行所 秋田魁新報社
 〒010-8601
 秋田市山王崎源町1番1号
 ©秋田魁新報社 2011年

特別紙面

- 2面 自衛隊10万人に増派へ
- 3面 原発20ヶ所の住民が避難
- 4面 救助よつやく本格化
- 5面 各国救助隊が続々到着
- 6、7面 写真グラフィック
- 18面 小中7校きょう休校

- 19面 畜産飼料の供給に不安
- 20面 被災地ルポ
- 21面 老人ク避難ドキュメント
- 22面 漂流2日、男性を救助
- 11面 スポーツ
- 14、15面 くらし

北斗星

日本は地震に強い国。そう思っていた。さまざまに地震を経験し、数多くの教訓を得てきた。だから、かなりの規模の揺れがあっても被害は最小限にとどまるのではないかと。その思いは無残に打ち砕かれた。マグニチュードが世界最大級の9.0に引き上げられた東日本大震災。規模の大きさをただでなく、津波の勢いが猛烈だった。東北の太平洋沿岸の市や町がのみ込まれ、死者の数は日に日に増えている。三陸沖などで大規模地震が起き、津波が発生することは想定されていた。ところが今回、津波は防波堤を壊れ、家屋を次々と破壊した。万一に備え対策を尽くしても限界があるということか。自然の脅威を感じずにはいられない。

ない。震災消沈している場面はない。被災地には孤立し、救助を求めている人がたくさんいる。がれきの下敷きになり、助けを求めている人も少なくないはずだ。人命救助は時間との闘い。迅速な対応が求められる。ドイツやスイスの救助犬チームなど、各国の援助隊が続々と日本に入った。中国の援助隊も加わり、生存者の救助や電気の供給などに当たる。ほかにも数多くの国が支援を申し出ている。力を借りて一人でも多くの命を救いたい。岩手県沿岸部に出掛けたまま連絡が取れなくなり、安否が気遣われていた五城目町や井川町などの一行43人は無事だった。津波が押し寄せる中、宿泊先のホテルの的確な誘導で高台に避難し被害を免れたという。惨事が相次ぐ中、救われる思いだ。